

氏名	川越誠志
授与した学位	博士
専攻分野の名称	医学
学位授与番号	博甲第 4711 号
学位授与の日付	平成25年 3月25日
学位授与の要件	医歯薬学総合研究科社会環境生命科学専攻 (学位規則第4条第1項該当)

学位論文題目 Study on the factors determining home death of patients during home care:  
A historical cohort study at a home care support clinic  
(訪問診療患者の在宅死成立因子の研究：  
在宅療養支援診療所の後ろ向きコホート研究)

論文審査委員 教授 荻野景規 教授 浜田淳 教授 松岡順治

#### 学位論文内容の要旨

近年、在宅医療を行う診療所が増加する中、在宅死の増加は少ない。海外の在宅死成立因子の報告では、ADL低下群と在宅死の関連も指摘されているが、本邦ではない。今回、一在宅療養支援診療所のデータを用い、後ろ向きコホート研究を行いADL低下群と在宅死の関連を検討した。対象は、2006年4月1日から5年間で在宅訪問診療を開始した148名。訪問開始時のADL高度低下の有無で二群に分け、比例ハザードモデルを用い、在宅死に対するADL高度低下のハザード比を求めた。ADL高度低下の調整ハザード比(95%信頼区間)は、4.40(2.37-8.16)であった。また、癌の有無で層別したサブグループ解析では、ADL高度低下の調整ハザード比が、癌群 5.64(2.47-12.91)、非癌群 11.96(3.39-42.15)であった。非癌群ほどADL高度低下と在宅死の関連が強く、訪問診療により、末期癌だけでなく、非癌寝たきり患者の在宅死増加の可能性が示唆された。

#### 論文審査結果の要旨

本邦で、在宅死成立因子に関する研究で、在宅死とADLの低下の関連性を検討した報告は少ない。そこで、2006年4月1日から5年間で在宅訪問診療を開始した148名を、訪問開始時のADL高度低下の有無で二群に分け、比例ハザードモデルを用い、在宅死とADLの低下の関連性を、在宅死に対するADL高度低下のハザード比により、後ろ向きコホート研究で検討した。在宅死発生に対するADL高度低下の調整ハザード比(95%信頼区間)は、4.40(2.37-8.16)であった。また、癌の有無での層別化サブグループ解析では、ADL高度低下の調整ハザード比が、癌群 5.64(2.47-12.91)、非癌群 11.96(3.39-42.15)であった。以上より、本研究は、訪問診療により高度にADLの低下した在宅患者が、在宅死できる可能性を示唆したことより、高齢者在宅医療を推進する上で非常に価値ある論文と認められた。

よって、本研究者は博士(医学)の学位を得る資格があると認める。